



図17 文化6年版本『浮世風呂』。右下にしているのが会話の主たち。

たとえば、『浮世風呂』。この作品は、銭湯の様子を活写したもので、江戸の人々の生き生きした会話が再現されています。次は、四十過ぎの父親が、自分の二人の子どもを連れて、銭湯にやってきた場面。六歳の男の子は、お父さんとお母さんをつないで歩き、三歳の女の子はお父さんにおんぶしている。図17の右下に、父親と父親におんぶした子、六歳の男の子の楽しそうな様子が描かれています。

当時は、女の子のことも「坊」と呼びます。「ちゃん」は、父を呼ぶ幼児語。口語訳をつけなくても、意味は十分に分かります。

(父)「ヲヨきたなやきたなや。コレ、兄さんの、わんわんのばばっちいを踏うとしたよ。坊はおとっさんにおんぶだから能い。」

話し言葉は会話文に

ここで特に発音に注目するのは、理由があります。室町時代末期以降、話し言葉の状況をよく映し出している資料に恵まれてくるからなのです。昔は、現在のように話し言葉を録音する技術などありません。ですから、記録された資料から当時の人々はどんな発音でどんな言葉を話していたのかということ推測していく以外に方法がない。

ところが、江戸時代になると、話し言葉をできるだけ忠実に写した文学作品が出てくる。た

江戸時代が、近代語のいぶきと聞くと、不審な顔をなさる方もいらっしゃるでしょう。近代は、明治時代から始まるのではないかと。でも、それは政治を中心にした歴史区分です。言葉の歴史から見ると、江戸時代にすでに現代の東京を中心とする言葉が形成されてきているのです。

特に、宝暦年間（七五一年〜一七六四年）になると、文化も江戸が中心になり、江戸語が共通語的な位置を占め、近代語の基盤を作っていきます。一体、どのようにして近代語は形成されていったのか。この章では、発音や言葉の面から、その疑問を追究してみようと思います。

「じ」「ち」と「ず」「づ」の発音が現在と同じに

では、早速、江戸時代になって、現代と同じ発音に変化したものに注目してみます。まず、現在の状況をおさえておきましょう。あなたの使っているザ行の「じ」とタ行の「ち」とを発音してみてください。違う音でしたか？ それとも、同じ音でしたか？

では、もう一問。ザ行の「ず」とタ行の「づ」を発音してみてください。どうですか？ どちらも同じに思えると、感じた方がいらつしやるに違いありません。正解です。えっ、文字が違うだろうとおつしやる方も、まあ聞いてください。

室町時代の終わり頃、つまり一六世紀の終わりごろ、「じ」と「ぢ」、「ず」と「づ」との音は、近くなってきたいました。もともとは、違う音です。違う音だったからこそ、違う文字が四つもあるのです。

ところが、江戸時代も元禄頃になると、「じ」「ぢ」と「ぢ」「ぢ」と「ぢ」「ぢ」と「ぢ」「ぢ」と「ぢ」「ぢ」が統合されて、現在と同じ発音「dʒi」と「dzu」の二音になってしまいました。元禄八年（一六九五）の『蜺縮涼鼓集』という本には、こんな意味のことが書いてあります。

京都、中国、坂東（＝関東）、北国の人に会って、「じ」「ぢ」、「ず」「づ」の発音に耳をすませると、区別がないように思える。ただ、筑紫（＝九州）の人は明確に言い分けている。字の読めない女の子でさえ、人に教わるわけでもないのに言い分けている。

元禄年間には、多くの土地で「じ」と「ぢ」、「ず」と「づ」の区別ができなくなっていることがわかります。実は、このころ活躍した松尾芭蕉も区別をしていなかったようです。彼の代表作『奥の細道』を読んでいると、「いず（＝出る）」と記しています。区別があれば、「いづ」と記すべきところです。芭蕉も、現在と同じく「dʒi」と「dzu」の二音しか発音していなかったのですね。

現在では、江戸時代の統合を継承していますから、「じ」と「ぢ」、「ず」と「づ」の音の区別はありません。「dʒi」と「dzu」の二音があるだけです。現在では、この二音に「じ」と「ず」の文字を与えました。にもかかわらず、「ぢ」「づ」の文字も残しました。そして、「現代仮名遣い」でこんな決まりをつくりました。まず、普通には、「じ」や「ず」の文字を当てる。

ただし、つぎの①②の場合には、例外的に「ぢ」や「づ」を使う。①「ぢ」や「づ」に続く場合には「ぢ」「づ」を使う。ですから、私たちは「ぢぢむ」「づづく」と書かねばなりません。②複合語になる前に、「ぢ」や「づ」で始まっている語に関しては、「ぢ」「づ」を使う。だから、私たちは「はなぢ（鼻+血）」「みかづき（三日+月）」と書かねばならないのです。でも、繰り返ししますが、発音は「dʒi」と「dzu」の二種類しかありません。ただ、表記上の約束で、四種類の文字を使っているにすぎません。

こうして、江戸時代に、濁音の数は現在と同じく、「がぎぐげ」「ざじずぜぞ」「だでど」

「ばびぶべば」の一八音になりました。

清音は、どうなっていたか

では、清音の方はどうなっていたでしょうか。第I章で、現在には四四音しか清音がないのに、奈良時代には、六一も清音があったことを述べました。平安時代になると、現在の状態に一挙に近づきます。例の「上代特殊仮名遣い」で書き分けられていた清音がほとんどなくなつたからです。「いろは歌」のできた一〇世紀の中頃には四七の清音になっています。後に、「いろは歌」の最後に「ん」を付けて、「いろは」四八字と言うこともありましたが、もともとの「いろは歌」には撥音の「ん」は入っていません。当時存在したすべての清音を一回だけ使って作つた歌なのですから。

さらに、平安時代の末期には「を」と「お」も統合されて、一つの音になり、清音は、四六音。まだ、「い」と「ゐ」、「え」と「ゑ」の音の区別があります。

でも、鎌倉時代の末頃には、「い」と「ゐ」、「え」と「ゑ」も、それぞれ統合されて一音になり、あわせて二音減少し、現在と同じ四四音になりました。清音の数は、それから現在までの七〇〇年ぐらいの間、変化していません。もうこれ以上、減らせない限界点に達しているのかもしれない。

濁音の方も、平安時代になると、「上代特殊仮名遣い」で区別されていた音がなくなり、ですから、奈良時代には二七音あつた濁音が、一〇音に減りました。その後は安定していましたが、江戸時代になって、今述べたように「じ」と「ぢ」、「ず」と「づ」が、それぞれ統合されて、現在と同じ一八音になったわけです。

母には二度会つたけれど

数量の問題ばかりではなく、発音の仕方、現在とほとんど同じになりました。

たとえば、現在のハ行音を発音してみてください。「ha」「ci」「fu」「he」「ho」と音声記号で書けるような発音です。「ハ」「ヘ」「ホ」の子音「h」が、ここでの問題です。では、「h」を発音してみてください。

こう言われると、私たち日本人はとても困ります。なぜなら、つねに母音「a」「i」「u」「e」「o」をくつつけて発音しているから、「h」だけを取り出して発音しろといわれても、難しい。子音だけを発音することがめつたにない日本人は、子音だらけの英語が下手です。

「h」は、疲れたりいやになつたりするときに発する溜息に近い音です。ひそかに溜息をついてみてください。声は出ませんね。声帯が振動しない音ですから。息だけが声帯の隙間を摩擦するようにして吐き出される音です。「声門音」と呼ばれます。「ハ」「ヘ」「ホ」の子音が、こ